

「2023年度タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学工学部3年 小川 遥

私は工学部に所属しており、将来は発展途上国を始めとする、貧しい国に住む人々の生活の質を向上させることができるような研究を行いたいという夢がある。今回のサマースクールに参加することを決めたのは、その夢を実現させていくにあたり、自分の目で貧しい地域で生活している人を見てみたいという動機故であった。つまり、乱暴に言ってしまうえばタイではなくてもよかったのである。しかし、私は今回タイへの渡航プログラムに参加できて非常に良かったと考えている。その理由の最たるものは、タイの言語、および文化が非常に興味深かったことである。今回のプログラムでは、タイ語を学ぶ時間が非常に長かった。私は今まで英語と第二外国語として中国語を学んだことがあるが、この2つの言語は比較的文法的に似ていることが多い。それに対し、今回学んだタイ語は、この2つの言語と似ている構造をもっていることもあれば、日本と文法的な構造が似ていることもあった。自分の知っている言語と比較しながら学び、特に日本語の特徴を再確認しながら学べたことは大変面白かった。また、タイは仏教徒が全国民の90パーセントを超える仏教国である。一方、日本ではいろいろな宗教が混ざっており、何か一つの宗教の世界観を深く理解することがあまり行われていない。そのため、今回、タイの仏教的な考え方を学び、実際に寺院に訪れるなどし、それに直接触れることができたのは大変興味深い経験であった。さらにまた、歴史についても、島国である日本と他の国と陸続きになっているタイとは異なる点が多く、非常に興味深かった。

私の将来の夢に関わる動機についても、その目標を達成することができた。今回、安全性の観点から、スラム街などを訪れることは断念したものの、バンコク市内で観光船に乗った時に水上生活者と呼ばれる人々の生活を見ることができた。彼らが貧困と呼ばれるかどうかは別にしても、日本での平均的な生活費と彼らの生活費を比較したとき、(物価の違いを差し引いても)おそらく彼らの生活費ほうが安い。しかし、彼らが不幸なのかと問われればそれは違うと思った。これは私の主観的な感覚であり、実際に話を聞くことができたわけではないため、賛否両論あると思うが、すくなくとも、高いお金を払って観光船に乗り、観光を楽しんでいた私たちが恨めしそうな表情を向けられることはなく、彼らが現状に対して不満しか抱いていないということはないのだろうと思った。このことから、私は今将来の研究の方向性を再度模索している。単純に物質的な豊かさを補償することは求められていないとすれば、貧困地域で暮らす人々に本当に求められていることは何なのか。今後自分の専門分野と照らし合わせながら考えていきたいと思う。

最後にこのような機会を与えてくださった、今回のプログラムの運営に関わる方々、チュラーロンコーン大学の皆さまに心から感謝申し上げたい。